

二葉亭四迷『浮雲』『平凡』で辿る 女性語の変遷

—— 〈「てよ・だわ」言葉〉の受容と
その社会的・歴史的要因——

塹江 美沙子

1. はじめに

日本語は世界の言語の中でも男女差が著しい言語の一つだと言われている(阿部1998)。その差は「助詞」「感嘆詞・間投詞」「人称代名詞」「敬語のレベルとその使用頻度」など多岐にわたっている。しかし、先行研究によれば、そのような男女差が一般の人たちの日常会話に認められだしたのは、高々この100年間のことであり、女性語は「時代が進むにつれて成立したもので、未開時代の痕跡ではない」(金田一1988:39)ということである。

私の調査(塹江2012)では、江戸前期には主に都会の上流階層に認められた話し言葉の男女差は、幕末には豊かな町人層にも現れはじめ、明治20年頃には、新興の中産階層へと広がっていった。特に、新時代のヒロインである女学生の登場によって、彼女たちの使用する〈「てよ・だわ」言葉〉が一種のジャルゴンとして、当時の人々の注意を引いている。小説の中でもリアリティを持たせようとする作家の意図から、女学生像の典型として、この言葉は盛んに使われ出した。その増幅作用によって、〈「てよ・だわ」言葉〉は徐々に一般にも広がり、日本の女性語はその特徴を更に著しくしていった。

その変化の過程を二葉亭四迷の『浮雲』『平凡』の作品から辿ってみたい。さらに、女性語の受容・拡大を促進させた要因として、国家の上部・下部構造についても触れることにする。

2. 明治の女学生の言葉遣い

三宅花圃の小説『藪の鶯』(1888)は、女学生たちの寮生活を中心に、その恋愛模様を描いたものであるが、そのころの女学生の特徴的な話し言葉が生き生きと写し出されている。花蒲自身が作中の人物たちと同様の体験をした21歳の若い女性であったということから、ここで交わされている会話や言葉遣いは、ほぼ実態に近いものと考えられる。ヒロインたちは、「およし遊ばせ、お持ち遊ばせ」といった〈遊ばせ言葉〉や、「および申ませう、御帰りなさる、召し上がれ」といった丁寧な敬語をベースにして、「サブスタンス、フェミニン、クイッキー・モーション」といった外来語、そして「温順な女徳、閑話休題、生きな慷慨」といった漢語を頻繁に使用している。更に、蓮っ葉だと響感をかっていた下町娘風の「よくつてよ、ほんとだワ、いやだワ」といった〈てよ・だわ〉言葉も盛んに用いている。

このように、明治20年代の女学生の話し言葉は多様性に富んでいた。女性ながら中・高等教育を受けることができるほど恵まれた中・上流階層としては、敬語を中心とする武士階級の〈お屋敷言葉〉を継承し、自らを女性と意識するところからは江戸時代の遊里がその発祥とも言われる「わ・よ・ね」といった柔らかい響きを持った終助詞を盛んに用いた。その一方で、女学生という身分からは、少なからぬ優越感をもって男子学生並みに「漢語・外来語」といったアカデミックな言葉も積極的に取り入れている。さらに、時代の先端を生きる若々しいエネルギーに溢れた女性集団としては、仲間内での一種のジャルゴンである〈てよ・だわ〉言葉の発信源ともなった。この〈てよ・だわ〉言葉は、当時の識者の間で甚だ評判が悪いものであり、尾崎紅葉はその「^{ことばじり}言尾」を「異様」だとし、これは「旧幕の頃青山に住める御家人の(身分いやしき)娘」の言葉から広まったものだと述べている(尾崎1888)。

このように、明治中期の女学生が前近代の上流・下流の二つの女性語の流れを抵抗なく合流させ、さらに多様なものとさせていたのは、新興の中産階級出身故であり、また、新しい女学生という身分故であったと私は考える(塹江2012)。

3. 〈「てよ・だわ」言葉〉の受容と広がり

この章では、二葉亭四迷の二つの小説『浮雲』（明治20年）、『平凡』（明治40年）から女性の会話を抽出し、〈「てよ・だわ」言葉〉を始めとする女性語が社会に浸透していく過程を追ってみたい。

表1 『浮雲』『平凡』の終助詞の対比

終助詞			『浮雲』		『平凡』
			お政	お勢	雪江
ダ(ア)ネ	男女	男	2		
ダヨ	男女	男	3		1
コト	男女	女		1	
～サ	男女	男	9	4	
～ナ	男女	男	2	3	2
ノネ(一)		女			3
～ノ	男女	女		3	
ノヨ	男女	女			1
～ヤ	男女	男	1		
体言+ヨ	男女	女		1	3
～ワ	男女	女	2	4	8
ワネ(一)		女			4
テヨ	—	女			9
会話の量：句点／読点			86／60	55／62	48／73
句・読点の合計			146	117	121

*表の○の数字は主に女性が使用する終助詞。

*選出範囲⁽¹⁾『浮雲』（新潮文庫）第三回・第四回 pp.21-43

『平凡』（新潮文庫）二十八～四十 pp.63-94

表1は二葉亭四迷の『浮雲』のお政とお勢、そして『平凡』の雪江の話し言葉から、終助詞の種類とその数を抜き出し、対比させたものである。その際に、小松（1988:94-106）が調査した、『浮世風呂』（江戸語）と『三四郎』（東京語）に現れる各終助詞の使用者の性別の分類の一部を参考とした。これに基づき、以下の事項を考察する。

(1) 『浮雲』のお政とお勢の会話からは、明治中期の中年女性と若い女性の

言葉遣いの違いを調べる。性差だけでなく年齢差、生育環境の差等が、どのように終助詞の用い方に表れているかを確認する。

- (2) 『浮雲』のお勢と、『平凡』の雪江の話し言葉からは、同じ作者によって描かれた20年の隔たりのある作品によって、若い女性の言葉遣いにどのような変化が見られるかを確認する。

3.1 同一作品の異なる世代の女性の会話

表1の『浮雲』のお政とお勢の言葉遣いの対比によって導き出された事柄は、以下のとおりである。

作品中のお勢は18歳の女性という設定であるから、その母お政は40歳ぐらいであろうか。二人に共通して見られるのは「サ、ナ、ワ」の三つである。まず、お勢の「サ」については、「長唄の方がいいサ」(1例)と、それよりやや丁寧な「からかいますのサ」といった「敬体(ます)＋のサ」(2例)、それに間投助詞として「それからサ」(1例)がある。これらは、お政同様、東京語では男性使用とされているものと同種のものと考えられる。

次に、お政の「ワ」とお勢の「ワ」の用い方は、今日の男女のイントネーションから推測して、異なるものと思われる。一貫して下町風のお政の口調から判断すると、この「いいワ」「どうも意気でいいワ」はおそらく下がり調子のイントネーションで、男性語と同類のものと考えられる。それに対して、お勢の「人間は品格が第一ですワ」は上がり調子の女性専用のものでみていだろう。

さらに「ナ」についても、東京語では男性専用と分類されているのは〔感動・禁止・念を押す〕場合で、お勢の「(いらっしやい)な」や、雪江の「(遊んでいらっしやい)な」はいずれも〔勧誘〕であり、女性専用のものでみなすことができる。すると、お政の終助詞はすべて東京語の男性使用と同じものとなるのに対して、お勢の場合は「サ」のみが男性使用の終助詞となり、「ワ、ナ」は女性専用のものでみなすことができる。

江戸語にない新しいものとしては、「ノ」「ワ」の頻発を始め、「コト」「体言＋ヨ」などがある。すると、お勢は「サ」以外はすべて女性専用とされる

終助詞を使用していることになり、お政の文末表現とは大きく異なっている。

更に、この母娘の違いが分かるように、以下に、お政、お勢の言い争いの場面を挙げてみる。口論の際には話し手の「地」が表れやすいと思われるからである。

お政「真個ほんどに本田さんは感心なもんだナ。(略)それから思うと文三なんざア
盆暗ぼんくらの意気地なしだっちゃアない、(略)なんぼ何だッて愛想が尽きらア」
お勢「だけれども本田さんは学問はできないようだワ」

お政「フム学問々々とお言いただけけれども、立身出世すればこそ学問だ。(略)
些とばかり書物が読めたッてねっから有難味がない」

お勢「それは不運だから仕様がないうワ」(第一篇・第六回 pp. 68-69)

このお政の「だ」「だナ」を含む伝法な話し言葉は、東京語では男性使用のものとなっている。一方、お勢は「ワ」「だワ」といった柔らかな終助詞を使っている。彼女の言葉遣いについては、作中に、「若し相愛してゐなければ文三に親しんでからお勢が言葉遣ひを改め起居動作を変へ蓮葉を罷めて優に艶しく女性らしく成筈もなし」(二篇35頁)という一節があるが、これは文三に対してだけでなく、上記のように、母親との言い争いの際にも、「優に艶しく女性らしく」を心掛けている様子が窺がえる。

このお政とお勢に見られる言葉遣いの大きな差はどのような理由から生じたものだろうか。まず前者は〈江戸語〉で、後者が〈東京語〉という①新旧の「世代の違い」が挙げられる。次に②生まれ育った環境(出自)による違いも大きい。お勢の父、孫兵衛は旧幕臣の出身であったが、維新後は、商人となり成功した人である。つまり、お勢は新しい時代の豊かな中産階級の女として育っている。一方、お政は、「お摩りからずるの後配」という設定で、旧社会の下層階級育ちの女なのである。

女中奉公をしていたお政には、学問を身に着ける余裕はなかった。それに対して、お勢は、小学校卒業と同時に、塾に入り漢学を学び、現在はさらに英語を学んでいる。蓮っ葉で浅薄な性格設定にもかかわらず、女性にも開か

れた学問は、彼女の教養を高めるとともに、言葉遣いも洗練された上品なものとしていく機会を与える。幕末に育った母親が身に着けたのが「下町風」の言葉だとすれば、娘は「山の手風」のお嬢様言葉を装っているのである。

さらに、使用する語種や語彙は、意識的または無意識的に行われる③自己のアイデンティティの表出意欲⁽²⁾に従って選択されるということも付け加えておきたい。江戸生まれの「お政」には、上昇志向もアイデンティティ意識も希薄であるように思われる。それに対して、お勢には、学者の娘や良家の学友との付き合いの影響もあって、上昇志向と強烈な自己顕示欲のもと、「教養ある良家のお嬢様」を演じている様子が随所に窺える。曰く「お勢は根生の軽躁者なれば（略）立居挙動から物の言いざままでそれ（隣家の儒学者の娘：塹江注）に似せ（略）。」「その後英学を初めてからは（略）襦袢がシャツになれば唐人髷も束髪に化け、ハンケチで咽喉を締め、うっとうしいを耐えて眼鏡を掛け（略）。」このように、お勢の自己演出が、その外見の装いから話し言葉にまで及んでいることが、地の文を通してアイロニカルに説明されている。

以上①から③に挙げたような要因が、『浮雲』の母娘の言葉遣いの違いを生んでいるものと考えられる。

3.2 同一作家の異なる時代の作品の会話

それでは、年齢、環境、教育レベルがほぼ同じ状況にあると思われる『浮雲』のお勢と、『平凡』の雪江の言葉遣いは、20年という創作時期の隔たりを経て、どのように変化しているであろうか。

明治20年から40年という時期は、日本の産業改革による資本主義の進展がみられ、対外的には日清・日露という大きな戦争を経験するという、社会的・歴史的に大きな変動期であった。

そこで、二人の同世代の女性の言葉遣いにも、そのような時代背景が反映されていると予想される。何よりも、法的・教育的に厳格なジェンダー統制が進み、男女がカテゴライズされていった時期に書かれた『平凡』には、四迷が忠実な会話の再現を試みたのであれば、当然のこととして、「女性

らしさ」の割合が増していると考えられるのである。

『浮雲』のお勢は18歳の女性、『平凡』の雪江は女学生で、「19歳の主人公より1～3歳年下」という設定であるから16～18歳であろう。表1の右端2列はお勢と雪江の終助詞を対比させたものである。その結果から次のような事柄が導き出された。

- (1) この表に挙げられた終助詞（一部、間投助詞を含む）は、『浮雲』6種類で、『平凡』は8種類。
- (2) 『浮雲』には「(からかいます)のサ」、「(それから)サ」と言ったやや中性的な終助詞・間投助詞が見られる。それに対して、『平凡』は長めの「ノヨ・ワネ」、さらに長めの「ワネー」「ノネー」といった柔らかい響きの終助詞が使われている。「体言+ヨ」「ワ」の使用も『平凡』は『浮雲』よりやや多く、いずれも「女性らしさ」を強調したものといえよう。
- (3) 『浮雲』に使われていないものとして、『平凡』には「ワネー」「ノネー」「ノヨ」「テヨ」が見られる。特に「ワネー」は4つ、「テヨ」は9つと多い。

全体的には女性専用と言われる終助詞が、『浮雲』の16回に対して、『平凡』では31回と、『浮雲』の2倍近く使われている。以上のことから、自らは〈女性語〉を使用することのなかった男性の作者にも、それと分かるほど若い女性の会話には20年前よりその特徴が著しく感受されていたという結論が導き出される。

『平凡』の雪江が相手の男性に対して恋の自覚が全くなかったのに対して、『浮雲』のお勢は明らかに、(少なくとも引用部分の第三・四回の段階では)あの手この手で相手の気を引こうと言葉を弄している。このように男性にアピールしようとする場合には、「女らしさ」を全開にして迫るのが世代を超えた常套手段との通念から鑑みるならば、『浮雲』のお勢の方が(会話の量がやや少ないということを考慮したとしても)、『平凡』の雪江より女性使用の終助詞が少ないというのは、作家二葉亭が感受した時代の反映とみなしてい

いだろう。

3.3 お勢と雪江の言葉遣いの対比

さらなる判断の手がかりとして、実際にお勢と雪江の具体的な会話の文末辞を抜き出してみたのが表2である。

表2 お勢と雪江の言葉遣いの対比

	『浮雲』「お勢」	VS	『平凡』「雪江」
	お 勢		雪 江
だよ			(掃除したん) だよ
ヨネー	(そうです) ヨネー (いけません) ヨネー		
ネー	(仕様のないもんです) ネー × 2		
の	(----しまいました) の (^{よったり} じゃない) の (4人しかない) の		
のよ			(先刻出て行った) のよ
(の)サ/ サ	(からかいますの) サ (何とかいいますの) サ (長唄の方がいい) サ (それから) サ *間投助詞1例		
よ/ヨ	(からかうのです) よ (説て見たのです) ヨ (いらっしゃい) ヨ (薦がとんでます) ヨ 他 8 例 (だから母親は厭) ヨ *「厭」(形動)を(体言扱い すれば「体言+ヨ」1例		(一寸いらっしゃい) よ (九時過ぎたでしょう) よ (そうしてらっしゃい) よ (此处) よ (皆留守) よ (立派なお支度) よ *「体言+よ」は3例
な/ナ	(お這入りなさい) な (いらっしゃい) な (一杯入れてください) ナ		(買ってらっしゃい) な (遊んでらっしゃい) な
ものヲ	(わかりません) ものヲ (破るんです) ものヲ (お言いだ) ものヲ		
わ/ワ	(----になりました) わ (免れっこ有りません) ワ (有ります) ワ× 2		(綺麗になった) わ (貸して上げられない) わ (まだ要らない) わ 他 5 例
か	(宜いじゃ有りません) か × 2 (そうです) か		

ネ/ね	(それは)ネ/(ですが)ネ (この間も)ネ (それでも)ネ (恥じたと見えて)ネ 他5例 *上記はすべて間投助詞	(そんなら)ね (---阿母さんも)ね (何でも)ね (それから)ね *上記はすべて間投助詞
わねえ		(机がない)わねえ (本箱も無かった)わねえ (---行っていた時だ)わねえ (不自由はない)わねえ
のねえ		(遠慮深い)のねえ (遅い)のねえ (大きくなった)のねえ
(ッ)て	(アノ、なんですッ)て×2 (解かりません)て (結婚してしまえッ)て	
てよ		(好くっ)てよ×2 (持って来)てよ (小さくッ)てよ (附着いて了っ)てよ (編物にやなくッ)てよ 他3例
こと	(アア佳い)こと	
エ(?)	(何故です)エ (何故出来ません)エ	
け(?)	(何人だッ)け	
と(?)	(どうしました)と	
の(?)	(どうなすった)の (何が残酷です)の (何か御用がある)の 他3例	(知らない)の? (どうして---震える)の?
か(?)	(母です)か (そうです)か	(貸して上げましょう)か
て(?)		(ご飯食べられ)て? (---にもお芋が有っ)て?
わねえ(?)		(そうだ)わねえ?

*表内の終助詞表記は原文に従った。

*調査範囲は表1と同様。

この表から導き出されるお勢と雪江の言葉遣いの違いは次のようにまとめられる。

- (1) お勢のことば遣いは、雪江より丁寧で、ほとんど敬体の「です・ます調」のあとに終助詞が続いている。例「～ですよ」「～ですよネ」「～ましたの／わ」「どうなすつたの」「そうですか」

これはおそらく話し相手の文三が「勤め人」であり、彼女にとっては年齢も身分も上ということを意識してのことだと思われる。加えて、お勢の気取りや過剰な自己演出も感じられる。それに対して、雪江の話し相手は年上とはいえ、遠慮のいらぬ下宿人の書生であり、そのためより親しくフランクな話し方になっているのであろう。また、常体中心の会話からは、作者による雪江の気取りのない素直な人柄を描こうとする意図も感じられる。

- (2) お勢は、後の東京語では男の使用となる終助詞や間投助詞の「さ」や、明治の後半には消えていった「エ」「と」といった中性的な疑問詞を用いている。

例：「からからかいますのサ」「どうしましたと」「何故ですエ」「と」については、文三にも「エ、あなたにもありますと。」という例にある通り、男女両用のものであったことが分かる。

- (3) 雪江には新しい終助詞「てよ」の他に、「ご飯食べられて?」「お芋が有って?」といった疑問を表す「て」が見られる。これらの「て」は新しい使い方といえる。

- (4) お勢は間投助詞の「ネ」を10回使用している。この「ネ」は話者の甘えや媚などの表現によく用いられるもので、お勢のこの「ネ」の頻発は、相手の気を引こうとしている気持ちを反映していると思われる。一方、雪江の方は4回で、お勢の半分以下である。ここにはお勢と雪江の性格と、それぞれの男性に対する心情が表れているようで、興味深い。

全体的にはお勢の方が丁寧な言葉遣いではあるものの、お勢の「わ・ワ」5回、「ヨネー」2回に対して、雪江の方は「わ」8回、「わねえ」4回、「のねえ」3回となっており、雪江の方が女性的な特徴を増しているといえよう。雪江の方には相手の男性に媚を売る意識も、その必要も全くなかったことを思えば、この言葉遣いにおける「女性らしさ」の進行は、この時代の都会の若い女性にみられた一般的な風潮であったと受け止めていいだろう。

さらに、本文でお勢は「君」「僕」という人称代名詞や「不条理」「同権論者」などといった漢語を用いており、多様な語種の使用が目立つ。話の内容については、「-----試みに男女交際論を説いてみたのですヨ。」「-----教養の無い者は仕様が無いのネ。」「僕の好きな同権論者はネ-----。」などと、文三や昇を相手に書生風の口調で論じたりしている。このように「知的な新時代のお嬢様」を演じるお勢の言葉遣いからは、女性語形成途上期の雑駁さと同時に、一種の活気のようなものが伝わってくる。同時に、「新時代の女」としてのお勢像が、その軽薄な性格の効果をも狙ってか、かなりカルカチュアライズされている。それに対して、雪江の言葉遣いは、より自然で屈託がなく、女性語形成期を経て、成熟期へ入ろうとする落ち着いた滑らかさが感じられる。そこには、もはや作者による誇張や、少々悪意を含んだ意図的な戯画化はみられない。

4. 女性語形成を促進させた要因

〈「てよ・だわ」言葉〉は、江戸下町娘風の活気のある蓮っ葉さ故に、明治の中頃までは下品なものとして当時の識者の矚躑を買っていた。しかし、明治40年の漱石の『三四郎』で、中産階級の若い女性たちの会話に頻繁に使用されていたこの言葉は、田山花袋の『妻』（明治42年）、漱石の『門』（明治43年）では、人妻にも使用されている。このように、〈「てよ・だわ」言葉〉は、明治30年頃から40年代にかけて、徐々に使用する年齢層の幅を広げていった。

ただし、この時代、〈「てよ・だわ」言葉〉を始めとする女性語の使用者は、主に都会に住む中流以上の教養ある女性を中心であったことに留意しておきたい。それは、この時期、豊かな中産階級が興隆してきた都会には「女は家

庭」「男は仕事」という性分業が成立したことによる。このような性分業の進行は、会話の内容から言葉遣いまで、男女に差を生じさせる要因の一つとなった。生産労働から離れた「主婦」⁽³⁾（木村2010）と言う身分は、『浮雲』の「お勢」の婿選びにもみられるように、若い女性の理想のステータスではあったが、それは同時に、女性が経済力を失い、働き手の夫へ依存するという弱い立場に留まることでもあった。女性の側により頻繁に、より高いレベルの敬語が使用されているのは、その男女の立ち位置の差の表れでもあることは言うまでもないだろう。このように、全家族の労働に支えられていた農業中心の労働形態から、商・工業の発展に伴う男性主体の賃金労働へ移っていくという社会の下部構造の転換が、女性語の進化を促した要因の一つとして挙げられる。

同時に上部構造にも女性語の進化を促す大きな要因があった。それは中央集権国家の形成途上における男尊女卑的諸制度（女性の選挙権を認めない憲法、女性の相続権・財産権を認めない民法）、また、学校教育を通して意図的に強化された近代日本のジェンダー統制（中村2008、2012）である。これらの諸制度による統制や規範は、10年ごとに繰り返された戦争を背景に、国家に奉仕する男女を育成するため、意図的に差異化を企図したものであった。女性語の進化・深化はその結果であったといえよう。

さらに、明治30年ごろから発達してきたマスコミの女性向けの雑誌が「役割語」（金水2003）として、若い女性のステレオタイプの話し言葉に与えた影響も少なくなかったと思われる。

5. 結び

明治初期には「品のない言葉」として、識者の中で顰蹙を買っていた〈てよ・だわ〉言葉は、時代が下るにつれて「女性らしい言葉」として女性の間に広まり、世間にも受容されていった。

このように女性語形成を加速させた大きな要因は、明治新生国家の上・下構造の変化によるところが大きい。まず、女性語の担い手であった中流階層の増加という社会の下部構造の変化がその底流にあった。同時に女性を二流

市民として法的に位置づけ、教育政策⁽⁴⁾を通して施行された国家のジェンダ一統制という上部構造の強力な働きかけがあったと考える。さらにマスコミの力も女性語の普及・拡大に大きな影響があったと考えられる。

注

- (1) 『平凡』で雪江が登場するのは二十八から四十で、その会話から表1の雪江の終助詞を得た。雪江の会話の量を、終助詞の表れやすい句点・読点で測ると121となった。それに近い会話量として、『浮雲』の三回・四回からお政（句読点：146）、お勢の会話（句読点：117）の終助詞を得た。
- (2) 「自己のアイデンティティ」の顕示が人々の意識に上ようになったのは近代以降といえよう。生涯身分の固定された前近代においては上昇志向やアイデンティティ意識は希薄であったと考えられるからである。
- (3) 「主婦」という言葉は明治中期に生まれたという。その存在が女学生の数と並行して徐々に増加していったのもこのころからと考えていだろう。
- (4) 男女別学や、男女によって教科の内容やレベルが異なっていたこと。国語の読本では男女で異なる終助詞を用いた会話文が示されていたこと。また、文法本には女性が用いる終助詞として「わ」や「ね」などが明記されていたことなど。

参考文献

阿部圭子(1998)「最も性差のある言語—言語の性差の多重構造」『月刊言語』27-5 pp. 72-76

大修館書店

尾崎紅葉(1888)「流行言葉」『紅葉全集 第10巻』pp. 4-5 岩波書店1994

木村涼子(2010)『主婦の誕生』吉川弘文館

金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店

金田一春彦(1988)『日本語(上)』岩波新書

小松寿雄(1988)「東京語における男女差の形成—終助詞を中心として—」『国語と国文学』
65-11 pp. 94-106 東京大学国語国文学会

田山花袋(1910)『妻』(『定本花袋全集 第1巻』臨川書店1993)

中村桃子(2007)『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房

中村桃子(2012)『女ことばと日本語』岩波新書

夏目漱石(1910)『門』岩波文庫

二葉亭四迷(1887)『浮雲』新潮文庫

二葉亭四迷(1907)『平凡』新潮文庫

塹江美沙子(2012)『明治30年ごろ〈女性語〉が拡大・普及したのはどうしてか——その社会的要因を探る』京都橘大学修士論文

三宅花圃(1888)『藪の鶯』(『現代日本文学全集84 明治小説集』筑摩書房1957)

(ほりえ みさこ)